第3回 みんゆう新聞感想文コンクール 最優秀・優秀作品

応募1033点

寄せられた新聞感想文を厳正に審査する審査員＝福島民友新聞社

◆最優秀賞（小学3・4年生の部）
「自分の意思で歩いていこう」
二本松北小4年　渡辺　弥生さん

私は「いじめ」が嫌だ。だから、この朝日新聞の連載を読んで、とてもいい記事だと思った。

残念だけれど私も意地悪をされている子を見ることがある。そんなとき、私は勇気を出して止めに入ることにしている。少しこわいときもあるけれど弱い立場の人の味方になりたくて、止めに入ってきた。でもいつも、心のどこかでどきどきしているのも事実だ。

この連載でメッセージを送ってくれている人の考え方は、本当に様々だ。いじめは決してなくならない、という人もいれば、きっとなくなるときが来る、という人もいる。けれども、みんな心にしみる力強い言葉で、私達を応援してくれている。あきらめてはだめだよ、大丈夫、味方はいるよと、温かな言葉で背中を押してくれている。

私が特に心を動かされたのが、玄侑宗久さんの「人の心には光と闇が重なり合う。でも、奥底にあるのはやはり光だ。…（中略）…誇りを持ち、君の意思で君らしい作品（人生）を作り上げていけ。」という言葉だ。私も学校で上級生に嫌なことをされたことがある。その人の心の中の闇は、もしかすると光よりも大きかったのかもしれない。でも私は、人に流されずに、自分の意思という足で、大地を踏みしめて人生を歩いていきたいと思う。そして、そうしたことの積み重ねによって、いじめをこえていけるのではないかと思う。

この連載を読んで、私は、自分のことだけではなくて、他の人の心も少し分かるようになった気がする。ほんの少しかもしれないけれど、強くなれた気がする。

たくさんの「先輩」からもらったエール。なんだか元気と勇気がわいてきた。

◆優秀賞（小学3・4年生の部）
「トウモロコシのひみつ」
杉田小3年　松井菜々美さん

「ななちゃん、おもしろい記事があるよ。」と言って、お母さんが新聞を見せてくれました。読んでみると「トウモロコシのヒゲ」についての記事でした。そこには、『トウモロコシの先たんから長いヒゲのようなものが出ているが、これはトウモロコシの「めしべ」で、食べるつぶの一つ一つからのびているのでつぶとヒゲの数は同じになる』と書いてありました。私は、本当なのかな？と気になったので、調べてみる事にしました。

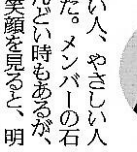
初めに、トウモロコシのかわをやさしくむき、めしべの数を数えます。その時に、二十本ずつのたばにして工作用紙にはりつけました。めしべをさわると、何だかべたべたしていました。たぶん、花ふんがつきやすいようにべたべたしているのだと思います。

次に、ゆでたトウモロコシのつぶを数えます。実がつぶれないようにていねいにとって、工作用紙のマスにならべました。マスは数えやすいように百マスずつ区切りました。

けっかは、めしべが七百七十本、つぶが六百八十四こでした。めしべの数の方が八十六本多かったです。どうしてだろう？。考えられる事は、数えている時にと中で切れたためしべをもう一度数えていたのかもしれません。それに、めしべに花ふんがつかなかったものもあるので、つぶにならなかったのだと思います。これは、新聞や図かんを見て思いました。他にも、お花はくきの先についていて、風がふくと花ふんがとばされてめしべにつく事や、めしべはじゅせいするとつぶから切れる事も分かりました。

新聞には、私が知らない事がたくさんけいさいされていて、読んでいると楽しくなります。これからも、楽しくためになる記事を読んで知しきをゆたかにしたいです。

◆優秀賞（小学3・4年生の部）
「いつも見守ってくれてありがとう」
柴宮小3年　会津　春菜さん



わたしは、山口県の「麦川安全・安心みまもり隊」の記事を読みました。それは、地いき住民自らが防犯や事故防止に取り組もうと「みまもり隊」を二〇〇四年に結成し、毎朝必ず地元小学校の通学路に立つ活動の内容でした。また、近所の高れい者とコミュニケーションを取りながら、地いきの絆を強くする活動もしていると書いてありました。

この記事を読んで、自分の子どもやまごのように考え、みんなを守ろうとするみまもり隊の人は、心の強い人、やさしい人だと思いました。メンバーの石川さんは「しんどい時もあるが、子どもたちの笑顔を見ると、明日もやろうと思える。」と言っています。つづけることはむずかしいのに、メンバーの方は、本当に子どもたちの安全を一番に考えてくれてるのだと思いました。

わたしの通学路にも、みまもり隊の人がいます。わたしは、みまもり隊の人にたすけられたことがあります。それは、わたしのかたがあまりこにもいたくて、ランドセルがせ負えなかった時でした。みまもり隊の人が、「どうしたの。」と、声をかけてくれました。わたしが理由をせつ明すると、みまもり隊の人はすぐにランドセルをもってくれて、と中までむかえにきていただいお母さんの所まではこんでくれました。最後はお礼を言って、お母さんと帰りました。わたしは、少し楽になってうれしかったし、交通事故がないように見守るだけではないことにおどろきました。

わたしは、みまもり隊にかんしゃの心をこめて、大きな声で元気にあいさつをしていきます。これからも、お体に気をつけて、わたしたちを見守ってほしいと思います。

◆優秀賞（小学3・4年生の部）
「私と飯舘村」
桜の聖母学院小4年　豊岡　桃香さん

「今度、飯舘村の除染が始まるんだけど、本当にこの予定通りに終わるのかなぁ。」と、首をかしげながら、お母さんが、新聞の記事を見せてくれました。飯舘村の除染がほとんど来年度中に終わるという内容の記事でした。私もお母さんと同じ気持ちで、

「えっ、そんなに早く終わるのかなぁ。」

って、ちょっと疑問に思ってしまいました。

飯舘村は、私のおじいちゃんやおばあちゃん、ひいおじいちゃんやひいおばあちゃん、他にもたくさんの知っている人が住んでいた所です。でも、原発事故のえいきょうで、今も飯舘村からひなんして生活しています。

私は、小さいころから、夏休みや冬休みの半分以上を飯舘村のおじいちゃんとおばあちゃんの家ですごしてきました。夏休みの天気のいい日に、窓を開けていると、必ずオニヤンマが飛んできて、回っているせんぷう機に止まります。毎年、同じようにやってくるのでとても不思議でした。夜には、げん関の前に、カブトムシが飛んできたりすることもありました。本当におもしろいことの連続です。冬はたくさん雪がふるので、雪だるまを何個も作ってならべて遊んだこともあります。そして、毎年五月に、田植えのお手伝いをしたこと、夏休みの朝にすごく早起きをして、おばあちゃんと野菜をとりに畑に行ったこと、私にとっては全部、宝物の思い出です。

飯舘村は、ほとんどが山と畑と田んぼです。だから、除染はとてもむずかしいことだと思います。でも、除染計画の記事は、飯舘村の人たちに、思っていたよりも早く帰るという希望を、あたえてくれたと思います。

私も、早く除染が終わって、飯舘村の人たちが安心して帰れる日が来ることを、心からお祈りしています。

「いじめ」問題に提言

◆最優秀賞（小学5・6年生の部）
「じいちゃんとあかつき」
坂下小6年　佐藤　菜月さん

じいちゃんは、おもしろくて楽しい。いつもみんなを笑わせてくれる。私は、そんなじいちゃんが大好き。

だから、新聞にじいちゃんがのっているのを見たときは、とってもびっくりした。昔、桃の研究をしていたことは知っていたけど、こんなに大変な苦労をしていたのだと初めて分かった。じいちゃんは、ずっと長い間研究して、やっとの思いであかつきを生み出したこと。福島県もじいちゃんを応援してくれたから、あきらめずにがんばり続けることができたこと。私の知らないじいちゃんの姿が、新聞に書かれていた。

私は新聞に感謝している。この記事のおかげで、私はじいちゃんの「あかつき」にかける情熱、そして苦労を知ることができたのだ。

しかし、なぜじいちゃんは、あかつきを作るのをあきらめなかったのだろう。失敗を繰り返していたら誰だって逃げ出したくなる。でも、じいちゃんはあきらめなかった。二十七年間もの長い間、研究に研究を重ねて「あかつき」を誕生させたのだ。

「じいちゃんは、この桃をどうしても大玉にしたかったんだよ。たくさんの人に愛される福島県の桃を育てたかった。果樹農家みんなの願いでもあったんだ。」

桃の話をしているじいちゃんは、輝いて見えた。自分の仕事に誇りを持って、今までじいちゃんは歩んできたんだ。じいちゃんが、「あかつき」にそそいだ情熱は、今もじいちゃんの中に生き続けていると感じた。

今年もたくさんの人がこの桃を食べ、笑顔になっているだろう。この夏は、いつもと違う気がした。じいちゃんの二十七年間の努力が実を結び誕生した「あかつき」。じいちゃんの情熱を感じた夏だった。

◆優秀賞（小学5・6年生の部）
「『いじめを見ている君へ』を読んで」
御山小5年　木村　真心君

ぼくは、大津市の中学生が自殺した事けんについてのニュースを見る度、とても悲しくやしい思いがこみ上げてきます。なぜ同級生達は、いじめている生徒に注意したり、先生に報告しないで、無関心でいられたのだろうか。

なぜこの事けんに関わった大人達は、自殺した中学生の苦しさや、家族の悲しさを理解しないで、自分達に都合の良い言いわけばかりし、無せきにんでいられるのだろうか。

そんな時、ぼくはこの新聞記事を読んで、とてもショックを受け、それと同時に、なぜというぎ問が解けました。

「ある日突然、子どもを卒業して大人になるわけじゃない。今の君の生き方が大人の君をつくるんだ。」

田中浜さんが、この言葉を直接ぼくに語りかけているように感じました。

今ぼくの学校に、いじめがそん在するのかどうかはわかりません。でも、いたずらを見かけることはあります。そんなとき、ぼくは注意しないことのほうが多いと思います。自分のことに置きかえたとき、いたずらされている同級生は、いたずらではなく、いじめられていると感じているかもしれません。

ぼく達小学生にとって、学校はとても大切な社会です。その社会での無関心無せきにんは、ぼくが大人になったとき、自分がいやだと思う自分をつくってしまうかもしれません。

ぼくは、他の人の心のいたみを理解して、他の人につくすことのできる社会を実現したいと考えています。そのためには、今の自分が「いじめ」に関心をもち、せきにんある行動をすることが大切だと思います。この新聞記事は、そのことをぼくに教えてくれました。「かっこいい自分」を必ず実現します。

◆優秀賞（小学5・6年生の部）
「『初』という挑戦」
福島一小6年　梅津　大揮君

七月十六日の福島民友に「星出さん2度目の宇宙」という記事があった。ぼくはその記事にくぎづけになり、夢中で読み始めた。記事の内容は、日本人宇宙飛行士の星出彰彦さんが、二度目の宇宙へ行き、国際宇宙ステーションでいろいろな実験をするというものだった。

ぼくが、この記事に夢中になる理由は、ぼくが書いたたんざくが星出さんといっしょに宇宙へ行ったからだ。今年の七月七日の七夕の日に、ぼくは茨城県つくば市にある宇宙センターJAXAに行ってきた。そこでぼくは、衛星やステーションのくらしなどを見学するだけではなく、たんざくを宇宙へ持っていってくれるイベントに参加し、たんざくを書いたのだ。自分が書いたたんざくが宇宙にあると思うと、不思議な気持ちになる。

記事を読んでいてぼくは「日本人初」「ステーション初」などたくさんの「初」があることに気づいた。ぼくは初という言葉に対して、プレッシャーや心配はないのかなと思った。でも、いろいろな訓練の積み重ねがプレッシャーや心配を乗り越えることにつながって、さらに自分ならできるという自信を生み出しているのだろうとぼくは思った。

ぼくは将来、科学者になりたいと思っている。科学者になって多くの人が喜んでくれる物を開発したい。これまでになかった物を開発し、多くの人を喜ばせるには、根気強い研究や実験をくり返すことが必要であるはずだ。と中であきらめたくなるかもしれないが、最後までやり通す強い意志をもってやればきっとぼくにも世界初となる開発ができると思った。

◆優秀賞（小学5・6年生の部）
「心の出口はすぐそこに」
泉北小6年　伊藤　夢絵さん

いじめの問題に関するニュースが、テレビなどで毎日のように取り上げられていたころ、この記事が目に留まりました。

読み始めるとまず、いじめられている人へのメッセージが書かれていました。いじめられている人達の心の中は、出口がなくて、つらくて楽になりたいという思いでいっぱいかもしれません。でも、振り返れば、苦しいのはその一時期だけなんだと、尾木直樹さんは言っています。尾木さんのところに寄せられているたくさんの手紙は、どれも、死ななくて良かったという報告ばかりだそうです。人は、いやな思いをした分だけ他人にやさしくなれると何かの本で読んだことがあります。いじめられた経験を持つ人は、その先の人生で、人として大きく成長できるのではないかと思います。

いじめている人は、どれほど相手を傷付けているのか、気付いていないのかもしれません。でも、相手がいやがる事をして喜ぶなんて、人間性がゆがんでいる証拠だと、尾木さんは言います。そういう人は、いずれ、自分の居場所がなくなり、必ず痛い目に合うと言っていますが、私も同じ気持ちです。また、周りの人達も、関係ないと言って無視してはいけないと思います。勇気を持ちましょう。

このような尾木さんの伝えたいことを読んで、いじめられていじめている人達の心の出口を見つけたことでしょう。だれが何と言おうと、自分は自分。これからの人生を思いっきり楽しもうという明るい気持ちが、心の出口を照らしてくれると私は思います。

自分自身の人生は、かけがえのないものだから大切にしなくてはいけないなと心から実感しました。この記事をできるだけ多くの人達に読んでもらって、明るい前向きな気持ちを持ってくれることを願いたいです。